第3種郵便物認可

カルチャー WEST

スペインの詩人ガルシア・ロルカの「血の婚礼」が劇団GIGAによって野外移動劇で上演された。どんな天候も邪魔も作品の一部のため（初日は大雨の公演だったらしい）印象は偶然に左右される。幸いに私が見た千秋楽は好天に恵まれた（10月17日、福岡市・舞鶴公園）。

結婚式当日に花嫁が昔の恋人と逃げ、追いかけた夫と恋人が殺し合って死ぬ物語だ。舞鶴公園の数カ所を舞台として、移動しつつ劇が展開する。

野外移動劇「血の婚礼」＝劇団GIGA提供

「評」 演劇　劇団GIGA「血の婚礼」

「世界からの逃走」試みた野外劇

得心したのは、演者の多くをダンサーにしたこと。野外は劇場と違い人が背景に埋没しやすいが、彼らの肉体は目を奪う。ことに結婚式の朝に村の若者が歌い踊る場面は動きが映えた。また花嫁をさらう昔の恋人の役に中国出身のレオを起用したのも好手。外国語なまりの日本語、長い黒髪とダンサーでもある体軀（たいく）も、閉鎖的世界を突破する役にふさわしい。

皮肉な偶然もあった。逃げた花嫁を追い観客も足早に過ぎる横で、本物の新郎新婦が写真撮影をしていたのだ。

山田恵理香（演出）は、2017年からロルカの悲劇三部作に取り組んできた。しかし本作だけが野外移動劇。それはなぜか。3作はいずれも閉鎖的因習、特に強い純潔思想に縛られた女性の話だ。だがその世界から逃走を試みるのは本作だけ。それが野外移動劇に合うと考えたのかもしれない。また追いつめられた2人が高揚し絶望を語る森の場面はちょうど日が落ちる頃。冷えた風と濃い影が末路を暗示させ効果的だった。

だが終幕が残念。男は死に、女だけが生き残る。そして花嫁は泣きながらも自分の純潔を訴える。つまり世界は何も変わっていないのだ。だが舞台となるのはかつての城門の先、隣の公園に抜ける道だ。それまでのうっそうとした場所から一転、空が広く、開放感が生まれてしまった。閉塞（へいそく）した世界に戻る虚無、反復する世界への絶望は伝わらない。悲劇は人が死ぬことではない。世界が変わらないことなのだ。

（柴山麻妃・演劇批評家）